

2019年9月26日  
ICD専門委員会

# これまでの日本精神神経学会での 病名検討の経緯

神庭重信

日本精神神経学会

# 精神科病名検討連絡会 発足以来の経緯 ①

- 2012年2月、DSM-5（米国精神医学会作成「精神疾患の分類と診断の手引き 第5版」、本学会が用語を監修）の病名を検討するため、本学会を中心に精神科病名検討連絡会を組織
  - H24本学会理事会にて「DSM-5病名・用語翻訳ガイドライン」作成決定
- DSM-5日本語版出版（精神神経学雑誌 第116巻第6号（2014）にて「DSM-5病名・用語翻訳ガイドライン（初版）」を資料として公開）
- DSM-5日本語版出版後もICD-11病名検討に向けて同連絡会を継続

# 精神科病名検討連絡会 発足以来の経緯 ②

- 一般対象パブリックコメント募集（2018年6月）
  - パブコメを踏まえた草案の見直し
- 本学会代議員対象アンケート実施（2019年2月）
  - アンケートを踏まえた草案の見直し
- 2019年6月 本学会学術総会代議員総会にて報告



# 新病名検討に際しての大原則

1. 患者中心の医療が行われる中で、病名・用語がよりわかりやすいもの、患者の理解と納得が得られやすいものであること
2. 差別意識や不快感を生まない名称であること
3. 国民の病気への認知度を高めやすいものであること
4. 直訳がふさわしくない場合には意訳を考え、カタカナをなるべく使わないこと
5. ICD-11では、原則としてdisorderを「症」と訳すこと

# DSM-5病名・用語 翻訳ガイドライン（初版） 2014年

精神神経学雑誌 第116巻 第6号 (2014) 429-457頁

資 料

## DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン（初版）

日本精神神経学会 精神科病名検討連絡会

日本精神神経学会精神科用語検討委員会は、精神科関連 15 学会・委員会の代表者として、日本精神神経学会精神科病名検討連絡会を組織し、総計 17 回にわたり連絡会議を開催し、DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン（初版）を作成した。この過程で、本学会の代議員にアンケートを行い、また一般会員から意見を募集し、それらの結果を検討し議論を重ねた。

<索引用語：DSM-5, 病名, 用語>

# 病名変更の例 ①：

## 「～障害」から「～症」へ

- 日本語の「障害」は、**disorder**の訳語として用いられるが**disability**の意味でより広く理解されている
- 精神疾患の中には可逆性のものも多くあり、精神疾患が**disability**であるかのような誤解は偏見を助長する
- 「～障害」と診断されることは、当事者にとって負担感が大きいとの懸念
- 上記の点から、例外を除き、全面的に「～障害」を「～症」と置き換えることを提案
  - 例：学習障害 ➡ 学習症、パニック障害 ➡ パニック症

# 病名変更の例②（原則の例外）：

## Depressive Disorderの訳出

- Depressive Disorderは従来「うつ病性障害」と訳
- 継続な啓発活動を通し、「うつ病」に関する国民の認知が向上してきた背景を評価
- 一方、新型うつ病など、「うつ病」という表現の一人歩きや濫用・誤用への懸念も
- 抑うつを呈する精神疾患という広義のDepressive Disorderは「抑うつ症」と訳
- いわゆる大うつ病 Major Depressive Disorderに相当する Depressive Disorderだけを「うつ病」と呼んでよいことを積極的に周知していく考え
  - 「うつ病」と呼んでいいのは、種々ある抑うつ症の中でも「単一エピソードうつ病」と「反復性うつ病」のみ



## 病名変更の例 ③：

「選択性緘黙」から「場面緘黙症」へ

- **Selective Mutism**  
(英語病名はICD-10から11で変更なし)
- 病態：ある場面では問題ない言語能力を発揮できるのに、別の場面ではまったく話せない  
(家では話せるのに学校では話せないなど)
- 「選択性」の表現は、本人がその場で話さないことを意図的に選択しているかのような誤解をされかねないとの懸念から、当事者を中心によく使われている「場面緘黙」を採用するようパブコメを通して働きかけがあった
- 病名検討の原則に照らし合わせ、「場面緘黙症」を採用

## 病名変更の例 ④： Disordersを「～症群」へ

- 日本語には英語における単数・複数に相当する表現が基本的にはないため、従来は**disorder**も**disorders**も「障害」と訳されていた
- 精神科領域では、第6章の中に設けられているサブグループの実際的・教育的価値（理解のしやすさ）を鑑み、個々の疾患**disorder**を束ねる概念**disorders**を「～症**群**」と表記したい考え

## 病名変更の例 ⑤：

### ICD-10から11で病名が変更された

- ICD-10: mental retardation 精神遅滞
- DSM-5: intellectual Disability/intellectual developmental disorder 知的能力障害/知的発達障害
- ICD-11: disorders of intellectual development 知的発達症
- DSM-IV: GID 性同一性障害
- DSM-5: Gender Dysphoria 性別違和
- ICD-11: Gender Incongruence 性別不合

## 病名変更の例 ⑥：

ICD-11で新しい病名が導入された

- Body-focused repetitive behavior disorders  
身体への反復行動症群
- Prolonged grief disorder 遷延性悲嘆症
- Hoarding disorder ためこみ症（DSM-5と統一）
- Bodily distress disorder 身体的苦痛症
- Body integrity dysphoria 身体完全性違和
- Neurocognitive disorders 神経認知症群

## 病名変更の例 ⑦：

従来の日本語病名が誤解・偏見を生んでいるもの

- **Adjustment Disorder** 適応障害→適応反応症
- **ADHD** 注意欠陥多動性障害→注意欠如多動症
- **Anorexia Nervosa** 神経性無食欲症→神経性やせ症（DSM-5にそろえる）
- **PTSD** 外傷後ストレス障害→心的外傷後ストレス症

# 病名変更の例 ⑤： 「精神病」から「精神症」へ

- **Psychosis / psychotic disorder**  
(英語病名はICD-10から11で変更なし)
- ICD-10では各々「精神病」「精神病性障害」
- 語源はドイツ語の **Psychose**
- 病態：指す病態・範囲は歴史的に変化を経ており、今日一般的には、現実検討の喪失（現実と非現実の区別がつかない）を中核に幻覚や妄想を主症状とする病態を指す
- **Psychose**が「精神病」と訳されて以来長く使われてきたが、「精神の病」は精神疾患、精神障害全般と混同されやすく、指す対象が異なるため不適
- さらに「精神病」の語がもつスティグマは大きい
- 本学会では「精神病」に代わる語として「精神症」を検討